博士学位論文審査要旨

２０１６年7月１９日

論 文 題 目： Ｈ・ソルドのシオニズム観と「ハダッサ」における展開
－アメリカ・ユダヤ人女性シオニストとしての
「ユダヤ的伝統」の再解釈－

学位申請者： 石黒（大岩根） 安里

審 査 委 員：

主 査： 神学研究科 教授 Ada Taggar-COHEN

副 査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副 査： 同志社大学 名誉教授 森 孝一

要 旨：

本論文の趣旨は、ヘンリエッタ・ソルド（1860-1945 年）のシオニズム観の独自性を分析し、彼女を通して、シオニズムの一側面を理解することである。ソルドは 1860 年に生まれ、ハンガリーに出自を持つユダヤ人の両親によって米国で育てられた。彼女は、ユダヤ教「保守派」の運動を先導する教育機関であるユダヤ教神学校で学んだ最初の女性であり、ユダヤ教出版協会の最初の女性編集者でもあった。1912 年、ソルドは女性シオニスト団体である「ハダッサ」を設立し、長年にわたり指導者の立場にあった。このハダッサは、第一次世界大戦前から英国によるパレスチナ委任統治期間を経てイスラエル国家成立に至るまでの長い期間にわたってシオニズム運動を支持する、米国における最も強力なユダヤ人女性の組織であった。

本論文は 5 つの章から構成されている。第 1 章は、ソルドの生きた時代背景を瞥見し、とりわけ父親であるラビ・ベンジャミン・ソルドからの影響に着目しながら、ソルドの略歴を紹介する。さらに、ソルドのアメリカ・シオニズムとの関わりを概観する。

第 2 章は、第一次世界大戦と第二次世界大戦の間のアメリカ・シオニズムを取り上げる。この時代に生まれた社会組織についての新しい考え方がリベラルなユダヤ人指導者たちに影響を及ぼした。ここで、ソルドのシオニズム観の特徴を明らかにするために、当時の重要なユダヤ人指導者の一人であったルイス・ブランダイス（1856-1941 年）との比較を試みる。彼は、ユダヤ人として米国連邦最高裁判所判事に初めて任命された人物である（1916-1939 年）。

第 3 章は、女性シオニスト団体としてハダッサの設立と活動、そしてアメリカのユダヤ人社会におけるハダッサの位置を論じる。ハダッサは医療と教育の支援だけを行い、政治的立場を明示しなかったことが大きな特徴である。さらに、パレスチナがユダヤ人にとって唯一の避難場所となり、ユダヤ人とアラブ人の関係が緊急な政治問題となった、第二次世界大戦中の複雑な状況についても説明される。

第 4 章は、ソルドの思想的、政治的見解をパレスチナや米国の主要なシオニスト活動家と比較をしながら論ずる。その違いの中心にあったのが、英国によるパレスチナ委任統治下でのユダヤ人とアラブ人の共存を目指そうとする彼女の主張であった。ソルドの考えはユダヤ人シオニストの主流派に受け入れられることはなかった。

第 5 章は、1896 年に行われたソルドのスピーチを取り上げる。彼女のユダヤ教観とシオニズム観がすでにそこで形作られており、4 章までに述べられた半世紀にわたる彼女の活動を導くものとなっているからである。

本論文は、ソルドのシオニズム観を平和主義的シオニストの観点から見てきたこれまでの研究とは異なり、彼女のユダヤ教理解に基づき解明していることが大きな特徴であり、このことはソルド研究およびアメリカ・シオニズム研究への重要な貢献と見なすことができる。ソルドの宗教や人種を問わず医療サービスを提供するという姿勢は、博愛主義にではなく、ユダヤ教に基づいていた。もっとも、ソルドはユダヤ教を宗教として理解していたのではなく、道徳的指針として信じていたのである。本論文著者は、ハイファ大学の研究生として1年間の滞在中に、エルサレムにあるシオニスト記録保管所、および、ニューヨークにあるシオニスト・ハダッサ記録保管所からソルドによって英語あるいはヘブライ語で書かれた文書を見つけ出し、それらを土台に説得力ある論を展開していることは高く評価される。よって、本論文は、博士（一神教研究）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

２０１６年7月１９日

論 文 題 目： Ｈ・ソルドのシオニズム観と「ハダッサ」における展開
ーアメリカ・ユダヤ人女性シオニストとしての
「ユダヤ的伝統」の再解釈ー

学位申請者： 石黒（大岩根） 安里

審 査 委 員：

主 査： 神学研究科 教授 Ada Taggar-COHEN

副 査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副 査： 同志社大学 名誉教授 森 孝一

要 旨：

石黒（大岩根）安里氏は、2010 年 3 月に同志社大学大学院神学研究科博士課程の前期課程を修了し、同年 4 月に後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たし、このたび学位論文を提出した。2016 年 7 月 12 日(火) 17 時より 2 時間、神学研究科委員会は総合試験を実施し、石黒（大岩根）氏からアメリカ・シオニズムの歴史的政治的背景、ならびに関連領域について十分な素養を有することを確認した。本論文で駆使された文献類を見ても明らかなように、現代ヘブライ語、英語、さらにドイツ語の高度な能力を有している。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：H・ソルドのシオニズム観と「ハダッサ」における展開
—アメリカ・ユダヤ人女性シオニストとしての「ユダヤ的伝統」の再解釈—

氏　　名：　石黒（大岩根）　安里

要　　旨：

1. 本研究の主旨

本研究は、ヘンリエッタ・ソルド（Henrietta Szold, 1860-1945）のシオニズム観の独自性を分析したものである。ソルドは、1860年にラビである父親のもとボルティモアで生まれた。1912年にニューヨークでアメリカ・女性シオニスト団体である「ハダッサ」を設立したことで知られる人物である。

本研究では、ルイス・ブランダイス（Louis D. Brandeis, 1856-1941）のシオニズム理念とソルドのシオニズム観の比較、またユダ・マグネス（Judah L. Magnes, 1877-1948）のユダヤ教理解とソルドのユダヤ教観の比較を通して、ソルドのシオニズム観の独自性について考察した。比較の対象として、ブランダイスとマグネスを取り上げた理由は次の通りである。ブランダイスは、イスラエル建国以前のアメリカ・シオニズム界における代表的人物の一人であったこと、マグネスは改革派の流れを汲むラビであり、ヘブライ大学の初代学長としても知られる人物であるが、マグネスに関してはソルドの生涯の友人であるという点が大きな理由である。

2. 方法論と先行研究との関わり——ヘンリエッタ・ソルドを取り上げる意義

シオニズムを分析する研究は、しばしばイデオロギーをめぐる論争に発展する傾向にある。そのような状況のなかで、一人の人物（シオニスト）を通してシオニズムの歴史（思想の変遷を辿る歴史）を考察することは一定の意義があるものだと思われる。

ソルドという人物に着目した理由は、ソルドが「平和主義シオニスト」（pacifist-Zionists）と呼ばれたシオニストであり、ソルド自身も自らを「シオニスト」であると公言していたためである。しかし、イスラエル建国後の今日ではソルドのような人物は、俗にいう「シオニスト」として認識されることは少ない。その理由は現在しばしば批判の対象とされる「シオニズム」あるいは「シオニスト」とは、ダヴィッド・ベン＝グリオンなどに見られる政治的に影響力を有した「シオニズム」・「シオニスト」を指しており、ソルドは政治的あるいは軍事的な面での影響力がほとんどなかったことを理由に、ソルドのような人物はもはや「シオニスト」ではない、という見解に依拠している。

シオニズムの思想的背景を論じる際にしばしば議論の対象とされる争点は、シオニストが聖書的モチーフ、ユダヤのシンボルを新たなアイデンティティ形成の拠り所とし、そしてホロコースト以降はその記憶をイデオロギー的な基盤として、シオニズムを正当化する「神話」に基づくものである。しかし、ソルドのユダヤ教とシオニズムの関係は、これらの「神話」に一見すると類似している部分が確認されるものの、ユダヤ教理解に関しては極めて独自な考え方を有していることを指摘した。争点の中心に位置づけられないため、シオニズムを思想的に論じる文脈では、ソルドはこれまで十分に光が当てられることのなかった人物である。シオニズムの複雑な歴史をより深く理解するうえでも、ソルドのシオニズム観を分析する意義があると考える。

しかし、ソルドは自身のシオニズム思想に関して体系的に論じた著作を残していないため、ソルドのシオニズム観を分析するうえで、資料が極めて少ないことが問題として挙げられる。この

限界を踏まえつつも、ソルドの生涯を時系列に概観しつつ、断片的にシオニズムに関して言及しているパンフレット、手紙、スピーチなどを手がかりに分析を行なった。体系だった著作がないという点では、マグネスについても該当する。マグネスについて博士論文をまとめ、出版した、Daniel P. Kotzin の研究（*Judah L. Magnes: An American Jewish Nonconformist* (Syracuse University Press, 2010.)）は、マグネスのシオニズム思想およびその活動に光を当てた本格的なマグネスの伝記であると言える。Kotzin の研究は一次資料を網羅しつつ、マグネスのシオニズム理念をマグネスの生涯を通して描き出した先駆的な試みである。本研究ではソルドのシオニズム観の分析を試みるうえで、Kotzin による研究手法（伝記的記述を通した思想研究）を参考にした。

またアメリカ・シオニズムを論じる場合、「ハダッサ」やソルドに関する言及が限定的になる傾向は、日本においても例外ではない。日本におけるアメリカ・シオニズムに関する本格的な研究は、奈良本英佑や池田有日子の研究が先駆的な試みとして知られている。これに対し、本研究はアメリカ・シオニズムの全容ないし、国際政治の文脈からの考察は極めて乏しいものであるが、ソルドという一人の人物に焦点を当てることで、イスラエル建国以前のアメリカ・シオニズムの一側面を描写するという点に特徴があり、ソルドや「ハダッサ」に関する研究としては日本ではこれまでのところ蓄積のない先駆的な分野を扱ったものである。

本研究との関連で重要であるソルドのシオニズム観の背景に関する先行研究は、次の 2 点のほかには今のところなされていない。一つは、Allon Gal の論文、"The Zionist Vision of Henrietta Szold"（2005 年）であり、もう一つは、Eric L. Goldstein の論文、"The Practical as Spiritual : Henrietta Szold's American Zionist Ideology, 1878-1920"（1995 年）である。また、パレスチナに渡ってからのソルドのシオニズム観に関連するものについては、Michael Brown の論文 "Henrietta Szold's Progressive American Vision of the Yishuv"（1996 年）が挙げられる。

Gal は「ソルドのシオニズム観が彼女のユダヤ教理解に根ざすものであった」と定義し、「ヨーロッパで発生したヘルツルのような政治的シオニズムとは徹底して区別する必要がある」と述べている。しかし Gal の論文の中では、ソルドのシオニズム理念とユダヤ教理解との関係についての考察にはそれほど紙面を割いておらず、さらなる検討の余地があると思われる。しかしながら、この問題は資料的制約からこれ以上考察の余地がない事柄であるのかもしれない。この課題は本研究においても十分に解決できたとは言い難い。

3. 構成

第 1 章では、ソルドの生きた時代背景を瞥見し、とりわけ父親であるラビ・ベンジャミン・ソルドからの影響に着目しながら、ソルドの略歴を紹介した。また、ソルドのアメリカ・シオニズムとの関わりを概観した。

第 2 章では、ソルドのシオニズム観の特徴を明らかにするために、ブランダイスとの比較を試みた。

第 3 章においては、ソルドが設立した「ハダッサ」に焦点を当て、ソルドと他の「ハダッサ」のシオニズムに関する見解の不一致を浮き彫りにした。旧ハダッサ・アーカイブの一次資料から、1940 年代前半においてソルドと他の「ハダッサ」の指導者との間に、シオニズム活動における関心事および優先事項に相違があったことを明らかにした。

第 4 章では、ソルドとマグネスのシオニズム観の背景について、「moral, morality, moral code, morally」といったキーワードを手がかりにしてシオニズムと道義心との関係をソルドとマグネスが残したスピーチや小論文から考察した。また、ソルドとマグネスがユダヤ教をどのように捉えていたのかを知るために、アハッド・ハアムの"Judaism and the Gospel"（1910 年）のテキストと比較しながら、彼らのユダヤ教理解を明らかにすることを試みた。

またマグネスやソルドの「共生」を目指すシオニズム理念は少数派であり、影響力が限定的で

あった点に関しても、1942 年のビルトモア会議に対する抵抗およびイフード（Ihud: “Union, Unity”）（1942 年）という団体での活動を通して確認した。

結論に相当する第 5 章では、ソルドのシオニズム観を知るうえで重要と思われる小論文とスピーチ原稿を取り上げ、ソルドのシオニズム観の主張とユダヤ教との関係を考察した。

4. 結論

以上の構成により明らかになった点は次の通りである。

これまで、ブランダイスとソルドは 1920 年代の革新主義の影響を受けて、シオニズム活動を展開したと位置づけられてきたが、ブランダイスとソルドのパレスチナ観を比較した結果、ブランダイスはアメリカニズムに基づいてシオニズム活動（パレスチナへの支援）を展開し、パレスチナでのアメリカの覇権を視野に入れていたことが明らかとなった。他方、ソルドはパレスチナへ救援物資や医師、看護師を派遣するといった、アメリカの最先端の技術や知識をパレスチナへ提供することを目的としていたが、パレスチナにおいてアメリカが一定の影響力を及ぼすことには関心がなかった。

ブランダイスは極めて世俗的な生活を送っていたが、ソルドとマグネスはユダヤ教の戒律を遵守しつつ、ユダヤ教の近代化にも積極的に対応していたことを確認した。ソルドは「ハダッサ」を設立し、その中でシオニズム活動を展開したが、シオニズム活動の動機の部分に関しては、「ハダッサ」の他の指導者よりもマグネスとの方がより距離が近かったことを提示した。

ソルドは自身をシオニズムへと駆り立てた理由はユダヤ教（Judaism）であるとし、「道義心（moral code）としてのユダヤ教を信じている」と述べている。このユダヤ教と道義心を結びつける見解は、アハッド・ハアムの 1910 年の“Judaism and the Gospel”に見られる発言と極めて類似している。またマグネスもソルドも、ユダヤ的な生活を保持するためにパレスチナが重要な要素であることを述べており、このことはアハッド・ハアムが提唱した文化的シオニズム、すなわち、ユダヤ人にとっての精神的な中心地としてパレスチナの地が必要であるという見解と同じであると言える。

以上のことから、ソルドもマグネスもアハッド・ハアムのユダヤ教理解を共有していたことが明らかとなった。しかしそれは単にアハッド・ハアムの文化的シオニズムの受容に留まるものではなく、本研究ではソルドやマグネスが「アメリカ版（型）文化的シオニズム」を展開していった可能性を示唆した。しかし「アメリカ版（型）文化的シオニズム」を考察するにはソルドとマグネスだけにとどまらず、ソロモン・シェヒターやホレス・カレンなどのシオニズム観との比較検討が必要であると考えられる。本研究ではソルドのシオニズム観について焦点を当てたため、より広範な視点での「アメリカ版（型）文化的シオニズム」に関する考察は今後の課題の一つとしたい。